

東姥神遺跡

県営圃場整備事業計画

予定工区内発掘調査報告書

1984

大泉村教育委員会

例　　言

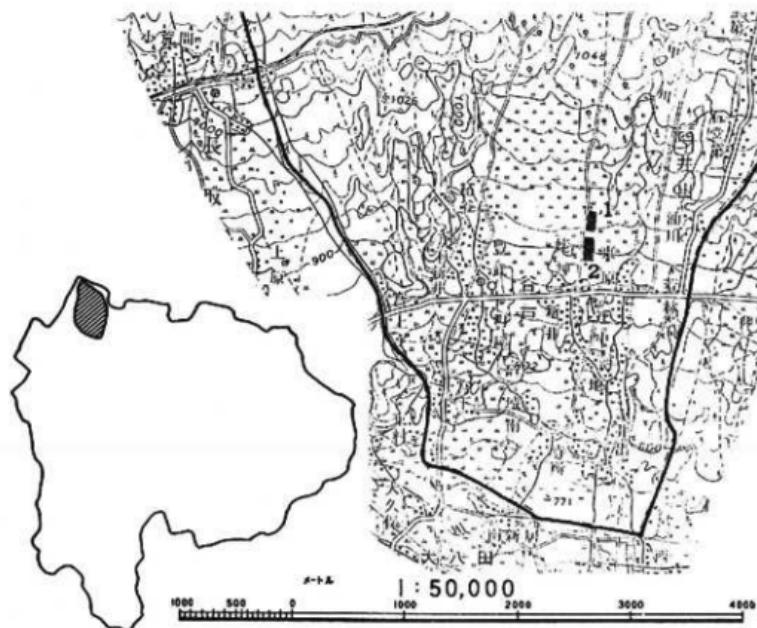
1. 本書は県営圃場整備事業に伴う東姥神遺跡の発掘調査報告書である。
2. 今回の発掘調査は、国庫・県費補助金・村費で実施した。
3. 発掘調査は、佐野勝広（國立館大学卒業）を担当者とし、大泉村教育委員会が実施した。
4. 本書の執筆、編集は、佐野勝広が行なった。
5. 発掘調査にあたり、山梨県教育委員会に全面的な協力を得たことを銘記し厚く感謝いたします。
6. 調査事務局、大泉村教育委員会、教育長、三井甲子雄、係長、山田初男。

目　　次

I　調査遺跡の位置と地理的環境.....	1
II　調査の経過と調査方法.....	2
III　調査の概要.....	5
IV　結　語.....	8

I 調査遺跡の位置と地理的環境

大泉村は、山梨県の北部に位置し、東経 $138^{\circ}23'34''$ であり、北は長野県境に接し、東から南にかけて高根町、西から南にかけては長坂町と接している。八ヶ岳南麓は赤岳を主峰とする八ヶ岳連峰を頂点として、南側に展開する一大緩傾斜の広大な高原である。標高1000~1500mの地帯には溶岩の碎物や、爆発時の降落成堆積物からなる。また、八ヶ岳の豊富な地下水は、大泉湧水をはじめとする20数ヶ所の水源を有し、それらの水源は、大門川、川俣川、油川、甲川、井の川、泉川、衣川、西泉川、宮川、山田川、鳩川、高川、等に流下し、須玉川に合流している。これらの河川によって細谷や舌状の尾根が数多く形成され、谷は水田、尾根は畑、山林、集落となる。さて今回、発掘調査を実施した東姥神遺跡は泉川と井の川によりできた丘陵上に位置する。



第1図 遺跡位置図

1 第1地点

2 第2地点

II 調査の経過と調査方法

近年北巨摩郡の各市町村では圃場整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査により歴史的文化的に貴重な数多くの遺跡が発見されている。大泉村においてもすでに圃場整備事業に伴って発掘調査が実施され、縄文時代晚期の配石遺構で全国的に有名になった金生遺跡をはじめ、全国でも有数の縄文時代前期の天神遺跡等が発見された。

本発掘調査は昭和59年度に計画されている県営圃場整備事業の工区内にある東姥神遺跡（第1地点・第2地点）の調査である。調査は調査の都合上、1期～4期にわけて実施した。1期は9月19日、21日、26日、29日、2期は10月15日、17日、18日、19日、20日、24日、25日、3期は11月17日、18日、19日、20日、4期は12月9日、10日、12日、13日、14日、15日、16日、17日である。

調査方法

調査は、昭和55年度の分布調査を参考にし、表面上に土器片の散布する地点を中心に、土器片の多くみられる地点はトレンチ方式、少數の地点はグリッド方式（2m×2m）、又1982年度に調査された東原遺跡の隣接地は、重機（ユンボ）の導入により遺構確認面まで土砂を耕土し、実施した。



発掘風景



第 2 図 発掘調査地点図（縮尺2000分の1）

III 調査の概要

1. 第1地点の調査

本地点は、
緩やかな南
斜面をなす
地形で標高
1000m前後
を計る地域
に位置する。

第1地点
で発掘調
査を施行し
た地点は、
地番3994、
3995、3997、
4014、4019、

4021-1、4151、4152、4153、4206、4207、4208、4209-1、4211、4212、4255、4226-1、
4226-2、4227、4228-2で総計20地点である。

調査方法

地番3994、
3995、3997、
4014、4019、
4021-1、
4151、4152、
4153、4206、
4207、4208、
4211、4212、
4225、4226
-1、4227、
4228-2は
グリット(2
 $m \times 2m$)を



地番4021-4地点



地番4209-1地点

2ヶ所設定し、4209—1と4228—2の一部はトレーナーを設定し調査を行なった。

層序

層序は大略次の通りである。第1層は、耕作により擾乱された有機質の黒色土層、第2層は、黒褐色土層、第3層は黄褐色の砂礫層で、土層の堆積状態は

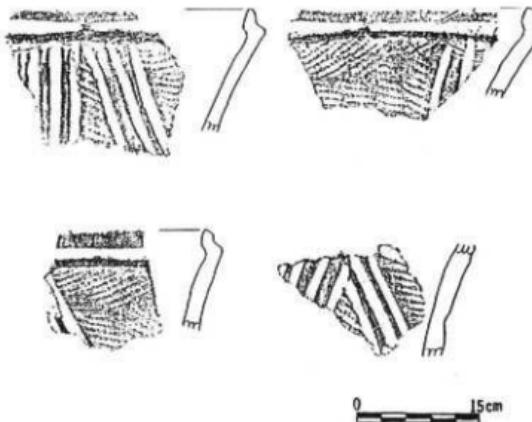


地番4209—1 地点

大差なく、ほぼ水平である。

遺構・遺物

本地点においては、遺構と認められるものは何ら検出できなかった。遺物は地番4209—1の栗畠より縄文時代後期初頭の堀之内式土器片が数片出土したにすぎない。



第3図 地番4209—1 出土遺物

2. 第2地点の調査

本地点は、八ヶ岳より続く南斜面の台地上で標高900前後を計り、比較的平坦な地形をなしている。第2地点で発掘調査を実施した地点は、地番4244、4245-1、2245-2、4256、4257、4270、4271、4273、4279、4280、4281、4282、4283-1、4284、

4285、4286、4291、4319、4324-1、4324-2、4324-4、4331、4332の総計23地点である。

調査方法

地番4244、4245-1、4245-2、4256、4257、4270、4271、4273、4279、4284、4285、4286の12地点は、グリット（2m×2m）を1ヵ所から2ヵ所に設定し、調査を行ない。地番4280、4281、4282、4283-1、4291の5地点は、平安時代の集落遺跡である東原遺跡の隣接地であるため重機（ユンボ）により土砂を排土した後に調査を行なった。地番4319、4324-1、4324-2、4324-4、4331、4332の6地点は、平安時代の土師器片が表面に認められたためトレンチ（幅2m）を設け調査を実施した。

層序

地番4244、4245-1、4245-2、4256、4257、4270、4271、4273、4279、4280、4281、4282、4283-1、4284、4285、4286、4291の17地点の層序は、第1地点の層序と同様で、第1層は耕作により擾乱された有機質の黒色土層、第2層は黒褐色土層、第3層は黄



地番4280地点



地番4291地点

褐色砂礫層である。地番4319、4324-1、4324-2、4324-4、4331、4332の6地点の層序は、第1層、耕作により攪乱された有機質の黒色土層、第2層、黒褐色土層、第3層、黄褐色のハードローム。これらの土層は、ほぼ水平堆積の状態を呈している。

遺構

地番4324-1の北隅にて、ローム層を切り込んだ黒褐色土の落ち込みが確認され、さらに、地番4324-2の東隅に約3mの範囲でローム層を切る黒褐色土の落ち込みが確認された。この2地点確認の黒褐色土の落ち込みは、平安時代後半の土師器片が出土していることから平安時代後半の堅穴住居址と推定される。

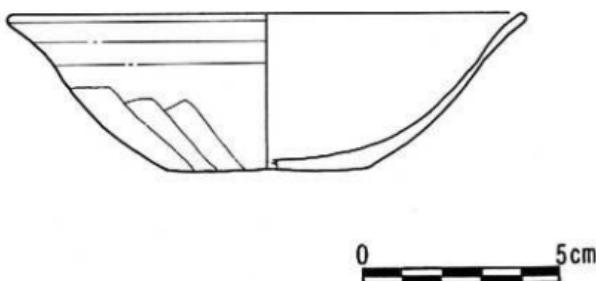
遺物

2軒の住居址共に平安時代後半の土師器片が数片出土している。(第4図)

VI 結語

発掘調査の実施遺跡は広大な台地であり、それぞれ表面観察によって若干の縄文式土器、土師器の破片が認められたため、当然集落跡の埋没が予測され、慎重を期す意味から、土器片が多く認められた地点はトレチ方式による調査を実施し、第2地点で平安時代後半の住居址2軒を確認した。しかし、第1地点では何らの遺構も確認されなかった。第2地点は、付近の地形から推察するに、まだ相当数の住居址が埋没されていると考えられ、本格的な発掘調査が必要である。以上が今回実施した発掘調査の調査結果である。

最後に、調査に際し、御指導、御協力いただいた関係機関、関係各位に対して厚く感謝申し上げる次第です。



第4図 地番4324-2・出土遺物



地番 4324-1

地点



地番 4324-4

地点



地番 4324-2

地点

シートがある地点
が住居址



地番4319地点



地番4319地点



地番4331

・4332地点

東姥神遺跡発掘調査報告書

印刷 1984年3月25日

発行 1984年3月30日

編集
発行 大泉村教育委員会

印刷 島北印刷(株)

